

幼児はみんな天才 対談漢字教育運動に生きて なぜ「石井漢字方式」を提唱し漢字運動をつづけてきたか 「九」より「鳩」の方がやさしい.....

吉田 どの国でも実際に社会で使っている表記を教へるといふ事はある訳ですけれども、その場合にも順序があって、綴りの難しいのは後にするとか、その中での順序はありますね。先生の場合は最初は順序までは行かなくて、とにかく本物をやらなければならないといふ考へ方でお始めになった。その点で誤解する人は、それはあまり教育的な発想ではなくて、もっと順序があるべきなんだから、要するに、時代に逆行することになりはしないかといふやうな考へを持つ人があるかも知れません。ところが、実際おやりになってある中で、漢字を教へるといふ場合だって、やはり教育的配慮といふのはある程度必要だといふことになって来るわけですね。

石井 初め易しいものから難しいものにだんだん移って行かうといふことでやったわけなんです。

ところがこれも、我々が易しいと思ふものが幼児には難しくても、我々が難しいと思っているものが、かへって幼児は喜んでそちらを先に覚えるといふ結果が出て来たわけです。

よく私が例に引くんですが、「鳩」といふ字を分解しますと、「九」といふ字と「鳥」といふ字になりますが、従来は九が易しいといふこ

とで九から教へてそれから鳥に移り、そして九と鳥の合はさった鳩を教へる。

これは、だれもが常識的にさう考へますけれども、実際に幼児に教へてみますと、鳩なら三歳の子供でも覚える。これは例外なく覚えますね。ところが、九といふ字になりますと、なかなか覚えられない。遂に鳩から鳥を覚え、鳥から九といふやうな、具象的なものからだんだんと抽象的なものへ理解が進むのが、幼児の理解の進み方であるといふことが、理論的には今までも言はれてみたんですけれども、それを漢字の具体的な指導に当てはめてみると、実は適用されなかったといふことが、今になると解る訳です。鳥といふ言葉を理解するのも、鳩を知り、鶴を知り鶏を知らなければ、鳥といふ概念はつかめないんです。最初から鳥といふものを理解させようとしても、どだい無理です。ですから、鳩とか、鶴とか、鶏などといふ言葉は、子供たちはすぐ覚えます。字形が複雑だといふことは、認識の手がかりがそれだけ増えるといふことなのです。文字を一つの符号として見る場合には、あまり簡単なものよりは、むしろ複雑なものの方が、手がかりが多くて、しっかり覚えられる

幼児はみんな天才 対談漢字教育運動に生きて なぜ「石井漢字方式」を提唱し漢字運動をつづけてきたか 「九」より「鳩」の方がやさしい.....

んですね。

吉田 このごろの子供といふのは、テレビを見ておている文字が出て来ますと、マークみたいな形で覚えてしまふわけですね。かなり複雑な文字でも読める字が出て来る。

石井 むしろさういふ複雑なものからだんだん、例へば鶴と、鶏と、鳩を習ひますと、そこに共通してある鳥といふ部分から、同時に鳥といふ概念を導き出す。そして鳥といふ言葉を理解するといふやうに認識を育てて行くのが、これが筋道だといふことも、やって行く間に発見したことなんです。

吉田 今どのくらゐ運動の広がり方が出来てあるわけですか。

石井 三年ほど前に、大阪のある幼稚園で始められた運動が、大阪で俄かに広がりまして、今では二、三百くらゐの幼稚園、人数にする
と二、三万人でせうか、そのくらゐの園児が、この実験に参加して
みます。

吉田 小学校の方はいかがですか。あまり普及しない.....？

石井 あまり普及しません。

吉田 指導要領なんかがあって.....？

石井 それが妨げさまたですね。

吉田 先生が 14 年間実践されて、ある程度いいといふことが判わかってあるんだから、それをやってみたくないといふ人は別ですけれども、やってみようといふ人はやれるやうでない困りますね。

石井 ところが、やろうといふ人たちが、校長に願ひ出ると校長がそれを押へる。また校長がやろうと思つても、それを教育委員会が押へるといふやうなところが非常に強いんですね。指導要領にちゃんと忠実にやってくれればそれでけっこうだ、それ以上よけいなことをやるなといふ領向が強く、非常に残念に思ふんです。